



ピッポ新聞

2007

3

No.218

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

『くちばし』と『くちばし
どれが一番りっぱ?』の
批評を読んで思ったこと

先頃、動物生態学者の今泉吉晴氏が『ネバーラ
ンド』8号誌上で福音館書店の『くちばし』
(ピアンキ・作 田中かな子・訳 藪内正幸・
絵)と、『くちばし どれが一番りっぱ?』
(ピアンキ・文 田中友子・訳 藪内正幸・絵)
の訳を巡って、原稿用紙約100枚にわたる批
評を発表した。

『くちばし どれが一番りっぱ?』は『くちば
し』の40年ぶりの改訳であるという。

旧版の田中かな子氏訳の『くちばし』は196
5年10月号のこどもとも115号として初め
て出され、次に、こどもとも傑作集として
(1967年〜1971年)ハードカバーで出
た。続いて、1982年には年中向きこども
とも(普及版?)の3月号としてペーパーバ
ックで再版され、さらに1998年に「64」
22こどもともコレクション」の1冊としてハ
ードカバーで出版された。

その後品切れになっていたが、昨年(2006
年3月)『くちばし どれが一番りっぱ?』と
いうタイトルで訳者を変更して、装丁も新たに、
改訳されて出版されたのである。

今泉氏はこの2冊を比較して、新訳に対して多
くの問題を提起した。ぼくはこの批評を読んで

ある意味でショックを受けたし、感動もした。

ぼくが子どもの本と関わるようになって約30年、
一冊の子どもの本に対して、これほど真剣にか
つ徹底的で真摯な批評に接した経験は初めてだ。

ある意味で生ぬるい印象批評に数多く接して
きた者には、さわやかな衝撃だったのである。

今泉氏はこの本を批評するに当たって、原作者
ピアンキの自然観はもとより、どんな時代的背
景のもとでこの本が生み出されたかなど多くの
ことを検証して、原作のもっている意味を充分
認識した上で、この2冊の翻訳絵本を批評して
いるのである。この批評態度は、自身が翻訳し
たシートン動物記(既刊9巻 福音館書店)に
たいするものとかかわらず、見事である。

批評は具体的かつ論理的であるので、読み手に
はとても分かり易い。思うに、その内容は専門
的知識にも裏打ちされているが、それを大上段
に振りかざして批判するのではなく、何よりも
今泉氏自身が子どもの本に対する認識が充分備
わった上で翻訳や批判をしているのである。ぼ
くはこのことに感動したのである。

昨年この新版の『くちばし どれが一番りっぱ?』
がでたとき、ぼくも読んでみた。ところが、な
にか違和感を感じるのである。旧版の『くちば
し』をもっていたので、くらべてみた。原因の
一つはすぐ判明した。表紙の絵が旧版とはちがっ
たものになっていたのである。

旧版との違いについて、新版の最終ページに
「編集部より」「くちばし どれが一番りっぱ?」
刊行にあたって、という断り書きがあった。こ

れでは否が応でも旧版と見比べないわけにはいかない。

以下はこの2冊に対する、ぼくの印象的批評(?)である。今泉氏の、あの良心的で真摯な批評を読んできました後では、これとさら印象的という言葉の前につけなければ恥ずかしくて何も書けないからである。でも絵本好きとして敢えて一言言わせてもらえば、絵本というのは印象的批評も大事であると思っっているのだ。



(旧版)



(新版)

ぼくは新版の表紙の絵が替えられたことによって、旧版の絵本としての良さが失われてしまったと思うのだが・・・。

旧版の表紙絵では、いわばこの絵本の主人公たるヒタキが、さまざまなくちばしを有した鳥たちと向きあっている場面が描かれている。

おもしろいのは、描かれている鳥の中で一番小さなヒタキが自分より大きな鳥たちと対しているということである。読者はこれを見て「はて、これからどんなことがく

りひろげられるのだろうか?」と、想像力を掻き立てられるのである。

さまざまなくちばしをもった鳥たちの絵は、裏表紙にまで続いている。しかもこの絵では、適度な空間を持って鳥だけが描かれていることで、とてもすっきりした表紙になっている。

ところが、新版ではこれがペリカンのおおきなくちばしの上にヒタキが留まっています、他の登場する鳥たちがこれを見上げているのだ(旧も新も同じ藪内さんのイラスト)。

ここでは旧版の対比の妙といったもの(こんなところが絵本の味わいなのだ)、ぼくはおもっている。そう、あくまでも印象的である)が失われてしまっている。

裏表紙には、表表紙の鳥群と反対の方を向いてシギが一羽だけという絵である。このシギは表の絵との連続性や関連性は無いようだ。ぼくにはただアクセントとして裏表紙に使われただけとしか写らないのだ。

表と裏を切り離れた絵を採用した意味が分からないだけでなく、構図的にも旧版の方が自然だと思う。新版は表の絵はゴチャゴチャしているのに、裏表紙がシギ1羽だけの間が抜けている。両ページを広げて眺めた場合、デザイン的なアンバランスがとも気になるのだ。

この旧と新の絵は、もともと2つとも藪内氏が表紙用に描いた(これはあくまでも想像)ものであるかもしれないが、旧版の表紙絵のほうに絵本として理に適っている

思うし、自然だとも思う。このことから、少なくとも表紙絵を替える必要性などなかったのではないだろうか。

ところで、ぼくにはこの新・旧2冊の絵本で、福音館にどうしても聞きたい疑問がある。それは、旧版ではこの絵本はNDCの分類は913となっていた。NDCでは913は日本文学のはずだ。でも絵本の作者はロシア人のビアンキで、これは翻訳絵本であるのだ。だから983のロシア文学に入るのではないだろうか?

さらに分からないのは、新版ではNDC481となっていることだ。これは自然科学の動物学の分類である。

もとより、分類は見方や視点によっては違ってくる場合もあるだろうが、913はちよと違つのではないだろうか。もしかしてミスプリントか?

それと、新版の動物学への分類の移行は、今泉氏の評論を読めば、なぜビアンキが、ロシアの自然をテーマにこどもたちにお話を創作したかが理解でき、この動物学への分類の移行も余り適当ではないことが分かるのである。

さて、ぼくは子ども本の世界の人たちが、この今泉氏の批評をどう評価(扱)うことも含めて)するのがとても楽しみでもある。今泉氏のこの批評を多くの人にお薦めしたい。ネバーランド8号(株)てらいんく 電話 044(953)1828 ピッポには在庫があります。

ジョギングと 中学生のイタズラ

3月4日の日曜日、駿府マラソンの10キロに出た。結果は1時間22秒というもので、散散であった。息子に「その記録は走ったと言うより、早足で歩いた記録ではないのか」とまで言われてしまった。

このていたらくは、息子に言われるまでもなく、走った本人が一番ショックを受けているのである。

今回は、ぼくには一つの作戦があったのだ。折返し点までは押さえて走り、後半まで体力を保持して、ラスト2キロで並みいる走者を牛蒡抜きにして、かっこよくゴールするというものである。作戦は完璧だったのだ！

しかし、当日は思いの外気温が高かった。この気温にたたられて、後半の牛蒡抜きなど夢のまた夢に終わってしまい、ただただ青息吐息でゴールしたのである。

だがしかし、ぼくにだって言い分はあるのだ。というのは、当日の天候もさることながら、実は10キロ1時間22秒という結果の原因は他にあるのだ。

大会1週間前の日曜日、ぼくは練習中にちよつとした怪我を負ったのである。

大会を1週間後に控えて、張り切っているもののジョギングコースを走っていたときのことだ。そこは山道が狭まって長さ2キロ50センチほどの建築現場の足場のような

橋がかかっているところである。

両側切れ落ちていて、向かって右側は3メートルほど、ほぼ垂直落ち込み、左側は50度ほどの急斜面が2.5メートル落ち込んで、竹藪に続く斜面である。

ゆつくりと走りながら、その山道を下り、橋に近づいたとき、ぼくの姿を見た4、5人の中学生が逃げていったのである。おかしいとは思ったのだが、ぼくはかまわず橋に足を踏み込んだ。とたんに、左側の斜面に滑落したのである。それも顔面から。

一瞬何が何だか分からず、立ち上がった。目が回って、何かに捕まらなければ立っていられたなかった。暫くするとめまいはおさまったので、今度はどこかにすつ飛んだ眼鏡を探し出して、道へ這い登ったのである。

そこで何が起こったのかようやく理解した。橋桁の一部が取り払われていて、橋の片側が空中に浮いていたのである。それでぼくは落とし穴に落ちるように左側に落ちたのである。

ここではじめて、先程の中学生が、なぜ逃げたのかということと結びついたのである。ぼくの滑落の原因は彼らが作ったということだ。

よく見ると、右のあばら骨辺りのジャージが大きく裂けていた。そういえば、落ちる途中で何かに一度引つかかったようで、幸いのことこれがブレーキになって、顔と地面が衝突したが、左目の上がひりひりする程度である。

一度は走るのをやめて帰ろうかと思つた

が、足はなんともないのでジョギングを続けることにした。

それから、アップダウンの山道を10分ほど走ったところで、先程逃げた中学生2人に追いついた。こちらは追いかけるつもりなどはなかったのである。彼らもぼくが追いついてくるとは予想だにしていなかったようであった。

腹立たしいことに、彼らのイタズラでぼくが滑落したことさえ認識していなかったのである。後の仲間は少し先にいるということだ。

そこでぼくは彼らに橋にイタズラをしたことを問いつめたら、はじめは知らないと否定していたが、次には橋がおかしかったので直そうとしたというのである。

まあ、こちとらも、だてに年を食っているわけじゃないから、中学生の小僧どもの論理矛盾をついていいたら、意外と簡単に自分たちの行為であることを認めて、「ごめんなさい」というのである。

先に行っていた中学生は当然どこかへ逃げてしまつて戻つてはこない。地元の中学だという。

ぼくが不思議だったのは、かれらは自分たちの仕掛けたイタズラの結果を確かめようともしなかったことである。

子ども時代のイタズラは結果を見て、その結果が思い通りに成功したり、失敗したりするのを確認してこそ楽しい(?)のであり、イタズラが完結するのである。

ところがこのバカヤロウ中学生は結果を知ろうともしないのである。何のためのい

たずらかとこちらは言いたいのである。

このストコドツコイ!

しかし、ここでもつと問題なのは、彼ら
が自分たちのイタズラがどんな結果を招く
かという想像力が欠落していることなのだ。

この山道はポピュラーではないが、一応
日本平へのハイキングコースにもなってい
るし、事実、正規のルートにあきたりない
人たちがこの道を利用してのに出会う
ことがある。また、足腰を鍛えるために歩
いている老人やご夫婦とも、ときどき出会
うのである。

そんな人たちが通る山道の危険個所だか
らこそ、わざわざ橋を架けて無事通過でき
るようにしてあるのに、その橋桁をはずし
てしまつとは、もはやイタズラの範疇を越
えた行為である。

彼らは自分たちの行為がどんな結果を招
くのかを想像すらしようとしない(できな
い)のだ。

まかり間違えば、ぼくだって死んでいた
かもしれない(ちよとオーバーか)のであ
る。現にジャージが引つかかったのは細い
鉄の棒だったし、この上にまともに落下し
ていたら脇腹が突き破られたかもしれない
のだ。下の竹林まで落下して、竹の切り株
に顔面が突っ込んでいたかもしれないのだ。

ぼくは思ったのであるが、彼らは成長過
程(幼い時から)において、子ども同士で
多くの遊びの経験(イタズラをふくめ)を

して育つてこなかったのだらう。

だから物事の限界や加減といったことの
判断ができないのだ。しかも、このまま彼
らは大人になってしまふのである。これは
ある意味でとても恐ろしい事ではないだろ
うか。

というのは、こういうこと(物事の加減
や限界を知ること)は、どんな優秀な教師
であつたとしても教えることはできないか
らである。

唯一このことを可能にするのは、幼いと
きから仲間と遊ぶことによつて、様々なこ
とを経験して育つことしかないと思
うのである。

実はこれはあらゆる事に当てはまるので
ある。

子どもたちに「自然を大切に」だとか、
「命は尊い」などと百万回言うよりも、時
間と空間を保証して、大人は見守るだけ
良いのである。

偉い先生が集まつて「あーだこーだ」論
議したとしても、さらに子どもをがんじが
らめにするのが落ちで、ぼくにイタズラし
た中学生たちをもつと多く生み出すことだ
らう。

そうだ! マラソン大会であつた!

ぼくの怪我は擦過傷程度に考えていたら、
翌日顔の左半分が腫れて目の縁は紫色にな
り、ちよつとした「お岩さん」状態になつ

てしまつたのである。右の脇腹も、手のひ
ら大に紫色に鬱血していた。

格好悪くて外に出るのもはばかられる状
態であつたのだ。だから、大会までの一
週間というもの練習もほとんどできなかつ
たのである。

だからこそ、1時間22秒という結果だつ
たのだと、ぼくは思っていたのである。

そこで、駿府マラソンのときもらつたパ
ンフレットを見て、4月8日の焼津港マラ
ソンの10キロの部にエントリーして再挑戦
をすることにしたのである。結果は次号で
報告するので乞つこ期待!

お知らせ

福音館書店から復刊!

石井桃子さんの100才を記念して

『べんけいとおとみさん』 1680円

『迷子の天使』 1890円

『みんなのこもりうた』 1050円

『ぶかぶかティチ』 1260円

『きんいろのしか バングラディッシュの昔

話』 1365円

すみません。ピッポ新聞の2月号は休刊と
させていただきます。